

## 「頭よくドタバタ」な、面白くて深いオペレッタ

19世紀半ばのパリで大活躍した「オペレッタの王」オッフェンバック。その隠れた傑作『美しきエレーヌ』について、指揮の辻博之が語る。

オッフェンバックのオペレッタたちは、ヨハン・シュトラウス2世の『こうもり』などのウィンナ・オペレッタ、さらには20世紀のブロードウェイ・ミュージカルの原型となった。しかも、フランスなどヨーロッパでは、複数の傑作がいまも親しまれ、上演され続けている。その一つが『美しきエレーヌ』だ。

「内容はとても楽しんでいただけるものです。ギリシャ神話の、トロイア戦争という悲劇の発端パリスとエレーヌ(ヘレネー)のお話という、日本ではなじみがうすいかもかもしれません。でも、要するに不倫ものなんです。倦怠期の夫婦のもとに若いイケメンの男性がやってきて、心を動かされた妻がふとした瞬間に一線を越えてしまい、夫が怒り、周りを巻き込んでドタバタになるという、よくある展開です」

よくある展開だが、トロイア戦争の発端というきわどい部分。それをあえて喜劇にしてみせる。けっして単純なドタバタではない、深い洞察が台本と音楽にひそんでいる。

「オッフェンバックの音楽のリズムや転調は、飽きさせない愉快なものなのですが、一方で感情の描きかた、愛の描きかたや、エレーヌの葛藤などの音楽には、深さがあるんです。

心情表現が深いので、オペレッタを見ているはずなのに、すごくシリアスなものを見ている

のではないかと考えてくる。と、そう思って引きこまれた瞬間に、なんともバカバカしい音楽が出てきて(笑)、スカッとする。この対比が素晴らしいと思います」

親しみやすく、美しい音楽で、子どもにも初心者にも楽しめるが、その一方で、ロッシェリなど当時のパリで流行していたベルカント・オペラのパロディも出てくる。

「パリスがただの羊飼いでなくて、女神にリングを与えた、あのパリスだったとわかった瞬間(『パリスの審判』の話)から、全員が〈リンゴの男〉とくり返すだけで数分間、音楽が進む。シリアスなオペラを揶揄して、強烈に強調して、コミカルにしてしまうところがオッフェンバックの面白さ。頭よくドタバタをやるんです」

シリアスな心情表現、ベルカント・オペラ風の音楽も出てくるだけに、ふだんあまりブッファ(喜劇)をやらない本格派の歌手たちを、今回はあえて集めた。

「砂川涼子さんのエレーヌは本当に拝見したかったので、今回夢がかなって嬉しいです。工藤和真さんはプリモ・テノールとしてとてもカッコいいイメージがありますが、パリス役では急におかしなことをしたりする。メネラオス役の濱松孝行さんも美声で、イタリア・オペラではヒロイックな役をよくおやりになりま

すけれども、今回は倦怠期の困ったダメ夫。

伊藤貴之さんも『アイダ』の神官ランフィスの素晴らしい歌などでシリアスなイメージがありますが、カルカスは同じ神官でも偽の神託まででっち上げてしまう役。真面目に見える人が面白いことをやるときの面白さ、これが楽しみです。ご本人はとてもウィットに富んだ方なので。

2人のアイダスのうち、反中洋さんは聡明で上品なイメージ。もう一人の堀越俊成さんはマスキュラーな声なので、この2人がどういう化学反応をするのかも楽しみです」

ここに、アガメムノン役で晴雅彦が加わる。「お笑いでもシリアスなものでも、その道のプロの方が1人いると、舞台が締まるんです。シリアスな演劇に仲代達矢さんが出てくると、ギュッと締まる。それと同じく、お笑いに晴雅彦さんが出てくると、全部がゆるむんです(笑)。ブッファには欠かせない、日本を代表するオペラ歌手です」

さらに、声優・俳優として活躍中の土屋神葉の語りも楽しみです。

「声の魔術で、土屋さんはいろいろな役ができるはず。台本・構成演出の佐藤美晴さんの手腕にも期待してください」

取材・文：山崎浩太郎(音楽ジャーナリスト)



Hiroyuki Tsuji

撮影：清津和典



2024年2月17日(土) 14:00 開演 コンサートホール 詳細はP09へ

指揮：辻博之

台本・構成演出：佐藤美晴

出演：エレーヌ：砂川涼子 パリス：工藤和真

メネラオス：濱松孝行 アガメムノン：晴雅彦

カルカス：伊藤貴之 アイダスI：反中洋介

アイダスII：堀越俊成 語り(日本語)：土屋神葉 ほか

合唱：ザ・オペラ・クワイア

管弦楽：ザ・オペラ・バンド